

エッセイ

# 私の人生

徳増 公明

第四章

---

卷頭言（日本ムスリム協会会報より）

## 巻頭言

### 羅漢さんとイスラーム

会長 アミン・徳増公明

私の家の近くに五百羅漢寺がある。そこに146体の羅漢像が並んでいる。案内資料によると、元禄時代に僧侶であり仏師である松雲元慶が10数年の歳月をかけて、一人で彫りあげたものであるという。羅漢とは御釈迦様の弟子だった人たちである。一人ひとりの顔もポーズも違う羅漢像にはそれぞれの羅漢さんの言葉が記されており、その言葉に相応しい座像を拝見することができる。亡くなった親族や縁者に似た羅漢さんに、誰もが出逢うことができるといわれている。羅漢さんは人びとに愛され、親しまれ、心のよりどころだったとのことである。笑い、叫び、泣き、教えを説き、瞑想している羅漢さん達は、私達に、大切な何かを説いているようだ。

ここに、146人の羅漢さんの言葉からいくつかを紹介する。

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| 1 - 優しい言葉で人に接する        | 2 - 相手を敬う心で人に接する  |
| 3 - 正しい言葉で真実を語る        | 4 - おのれに厳しく、人には寛容 |
| 5 - 争いをやめ和合する          | 6 - 善意は報酬を求めない    |
| 7 - 仕事に最善を尽くす          | 8 - 広く学び、深く究める    |
| 9 - どんな苦難にも退かず、耐え忍ぶ    | 10 - すべての人は平等である  |
| 11 - 生きるとは生かされていることである | 12 - 信頼はこのうえない宝   |

これらの羅漢さんの言葉はイスラームが教える言行規範とつくづく類似していると思う。以前から、イスラーム諸国からやってきた外国人から「日本人の言行はムスリムの模範である、自国のムスリムたち以上にイスラームの規範に忠実だ」という言葉をよく聞いていた。日本人の祖先はおよそ1,500年前に伝えられた仏教を受入れて、その教えに共鳴し、自分たちの道徳のよりどころとして取り入れて、これが国民性形成に影響を与えてきたからではないかと思う。だが最近では、この道徳を大切に思わない人、忘れた人が増えてきたゆえか、社会問題、家庭問題が増加してきているように思う。残念なことである。道徳教育を大切にして他人に対してもっと思いやりを持ち、幸せで明るい社会を築かなければならない時期を迎えているのではないかとも思う。

クルアーン；

「あなたがた信仰するものよ、耐え忍びなさい。忍耐に極めて強く、互いに堅固でありなさい。」(3章200節)

「本当に信仰して善行に励み、礼拝の務めを守り、定めの手をなす者は、主の報奨を与えられ、恐れも憂いもない。」(2章277節)

日本ムスリム協会会報(203号・2019年4月)

## 巻頭言

### G20 諸宗教フォーラム 2019 京都に参加して思うこと

会長 アミン・徳増公明

世界中が注目したG20サミットが6月27日、28日大阪で開催された。その2週間前の6月11日、12日には国内の諸宗教団体が主催したG20諸宗教フォーラム2019が、海外からも宗教指導者約50名を招き、京都で開催された。G20サミット的首脳たちに宗教者としての提言を届けるためである。G20サミットは、2008年に起きた世界金融危機を契機として毎年開催されることになっているが、その主目的は、世界の財政、金融政策の健全化である。途上国の開発や地球規模の温暖化対策等についても議論している。加盟国の人口は世界人口の3分の2であり、その国民総生産(GDP)は世界の90%を占め、その世界的経済・社会への影響力は大きい。例えば、2008年にG8洞爺湖サミットが北海道洞爺湖のホテルで開催され、その際も事前に、諸宗教フォーラムが札幌で開催されていた。そしてG20サミットへの提言書を作成し官邸に出向き、当時の福田総理に手渡し、その翌年の開催国イタリアから礼状が届いている。その際の主な提言は世界主要国の軍事費総額約140兆円の1%を削減し、その節約された財源を環境保護のための活動を推進する「地球環境基金」の創設に充当するというものであった。しかしながらその後、軍事費は削減どころか年々増加し、期待はずれであった。軍

事拡張は争いを生み、戦争に発展する危険性すらある。今日の私達の生活に大きな影響を与えているのは政治家たちの決断である。良い政治は良い社会・良い国家を作り、良い社会・国家は平和な世界を作る。近年、政治家たちの言動は世界平和より自国の国力や利益を優先しているように思える。異なった国内事情を持つ各国の政治家が、統一見解を出し団結することは困難なことであるかもしれないが・・・。

一方で、庶民の精神的指導者である宗教指導者は、神から下された永遠不変の規範を基盤に、人種や国境を越えて、全人類の幸福や地球を守ろうと心がけている。それゆえに宗教指導者が政治家に協力し、共に平和を求めていくことは大切だと思う。今回の会議は、主催国である日本の安倍総理が議長として重責を果たし無事終えた。諸宗教フォーラム2019の成果である提言書(参照:P.18)は日本政府に手渡されたが、この提言書がG20サミット2019に少しでも反映されて、実行されることを願っている。

「われがあなたに啓典を下したのは、只かれらの争っていることに就いて解明するためであり、信仰するものに対する導きであり慈恵である。」(クルアーン16章64節)

日本ムスリム協会会報(第204号;2019年8月)

## 巻頭言

### 東京オリンピック・パラリンピックを迎えるに当たり

会長 アミン 徳増公明

いよいよ来年夏、東京オリンピック・パラリンピックがやってくる。このスポーツの祭典に向けて国内では会場や施設の準備、出場選手選考等が熱を上げてきた。日本での開催は1964年以來の56年ぶりだ。前回の1964年東京オリンピックでは戦後間もない厳しい国内事情にもかかわらず、全国民が各国選手を温かく迎え、彼らの活躍を夢中になって観戦したこと、また、この年をきっかけに新幹線が開通し、国内経済が急速に成長し、世界第二位の経済大国と言われるまでに発展したことが思い出される。

この世界的規模のスポーツの祭典は、大変意義のあるものだと思う。今日世界は環境破壊、核使用、領土拡大など地球規模の大きな問題を抱えている。そのおもな要因は、人間の欲望が自国または自己利益のため他国との協調に欠けているからでないかと思う。人間の欲望を抑えるためには、民族、国境、宗教の違いを乗り越えた共通のルールを作り、それを順守すれば問題が起こらないで済むであろう。その点、スポーツはひとつのルールの下で戦う。もちろん自国の選手を応援するのは人情で

あるが、感動を与えた素晴らしい成果を見せた選手には敵味方なく称賛の拍手を送る。もし、全人類が平安で健全な社会を目指すイスラーム法のような公正で不変なルールを順守したならば、たとえどのような問題が発生しても人びとは、諍いを起こしたり、対立したりして不安に陥れることはないであろう。

イスラーム諸国からも大勢の選手や観戦者がやって来る。私達の協会は、ドバイ首長管轄の慈善団体からの支援を受け、彼らを温かく迎え、また彼らが日本で快適に過ごせるような「日本とUAEの文化交流事業」を企画した。日本側オリンピック・パラリンピック関係者、特にホストタウン市町村の人たちに、ムスリムの生活基盤である食文化を中心としたイスラームについての講演とムスリム向け料理等を提供する予定である。

クルアーン；

「あなたがた信仰する者よ、アッラーがあなたがたに許されるもの、良いものを禁じてはならない。また法を越えてはならない。アッラーは法を超える者を御愛でにられない。」(5章87節)

## 巻頭言

### 新型コロナウイルスの試練に思う

会長 アミン 徳増公明

今回の新型コロナウイルス感染拡大は人類にとってかつてない程の厳しい試練である。一月下旬、中国武漢から始まった人から人へと感染する新型コロナウイルスは、瞬く間に国境を越えて世界中に広がり、3月末現在で180カ国、感染者は100万人、死亡者は5万人に達するという。国内でも感染者は鼠算式に増大し(4月3日現在、3,850人)、医療崩壊を招く勢いだ。私たちは死をもたらす日に見えないこのウイルスに大きな不安と恐怖を抱く日々を送っている。

発生当初から多くの医師や専門家が感染拡大の予防や対処法として、換気の悪い密閉空間、多くの人の密集する場所、近距離間での会話等を避けるように警告している。また早く感染検査をするように訴えてきた。ところが一部の事業者は収入減少で生活が苦しくなる、あるいは若者は致死率が低いとの情報に、この警告を軽視してきたように思える。また、政府は感染した国からの入国規制や集会・イベント等自粛要請をしてきたが、その対応は遅れてしまったような気がする。北海道知

事は道内各地に感染者が現れたこともあり、早期に全学校の休校を指示した。その時、その決意の法的根拠を記者から尋ねられた知事は「法的根拠はない。何よりも命が大切だ」と返答した。命を預かる行政の責任者として適切な判断だったと思う。こうした緊急事態の場合は、政治的、法律的、経済的配慮も大切だが、国民の健康や命を守ることを最優先し、早急に決断を下すことが求められる。当然なことだが国民の健康こそが、健全な社会を作り、健全な国家をつくる礎なのだ。国民は一人一人が危機意識を持ち、自分のため、社会のため、専門家や政府の訴えを重く受け止め、遵守する必要がある。早く治療薬が作られ、この問題が終息し、安心して生活できる社会に戻るように祈っている。最後に、このウイルスで亡くなられた方に哀悼の意を申し上げる。また感染者を救うために日夜献身的に尽くしている医療従事者の方に感謝を申し上げる。

「人の生命を救ったものは、全人類の生命を救ったのと同じである」(クルアーン5章32節)

## 巻頭言

### 「核兵器の廃止に向けて」

会長 アミン 徳増公明

神はクルアーンの中で学問を奨励しています。そして、学問の一つである科学の力で作り出したのが原子力です。その原子力からの核兵器・原子爆弾の恐ろしさについては誰でも知っているとおり、広島・長崎に投下された原爆によって多数の命が一瞬にして奪われました。またそのような核兵器が使用されることがあれば、再び同じような悲劇を生むでしょう。命は神から与えられたもので、私たちは人生を全うするまで命を大切にする義務があります。

科学者たちはエネルギー源とする平和利用のために、この原子力を作ったと主張しています。しかし人々は戦争に勝つための武器としても使おうとしています。昨年来日されたローマ教皇は、広島・長崎でのメッセージの中で「原子力の戦争目的の使用は倫理に反する、核兵器は保有することも倫理に反する。これについて私たちは神の裁きを受けることになる」と厳しく警告しています。人々はこのメッセージに命の大切さを再認識させられたはずで、大量殺害をもたらす核兵器は保有することも使用することも許されず、廃棄すべきです。

現実には、それは難しいことです。保有国が「自衛のための保有」を主張しているからです。危機を乗り越えるためには、すべての保有国が核兵器を使用しないことを約束するしかありません。理想に向かって、すべての保有国を含めた世界諸国が核兵器を廃棄処分することを約束し、その証として核兵器禁止条約に批准することです。そしてその監視機関を設立し、厳しく監視するのです。核兵器禁止条約を推進するためには、政治家と連携し進めていくことが重要です。被爆国の日本が、その先頭に立って推進することが大切です。私たちの協会がメンバーになっている世界宗教者平和会議日本委員会は核軍縮・不拡散議員連盟日本(PNND日本)と国連本部に提出する核兵器廃止に向けた共同提言文を作成しました。(参照:P. 54) この提言文が核兵器廃止実現への本当の第一歩になることを祈っています。

「一人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。一人の生命を救う者は全人類を救ったのと同じである」  
(クルアーン 5章 32節)

〈徳増公明の主な履歴〉

1943年4月10日；静岡県浜松市に生まれる。

1962年；拓殖大学入学。

1965年；エジプト政府の官費留学生としてカイロに到着。

1971年；東京のトルコ・モスクで増田輝子と結婚。

1976年；エジプト・アズハル大学法学部を卒業して帰国。

アラビア石油株式会社に就職。

1982年～1992年；アラビア石油リヤード事務所に勤務。

1985年；大巡礼（ハッジ）を行う。

2002年；拓殖大学イスラーム研究センター（2007年イスラーム研究所に改名）の研究員。

2003年；日本ムスリム協会10代会長に就任。

2017年；世界宗教者平和会議（WCRP）の核廃絶タスクフォースの一員、2020年理事職に就任。

2018年；アラビア石油を退職。

イスラーム研究所客員教授、その後名誉教授。

2021年；日本ムスリム協会会長職を退任し理事職。

2023年；自伝「だるまへの願い」を出版。

2024年；本「私のイスラーム観」を出版。

著書；本「私のイスラーム観」を引用、一部変更。